北海道の国際協力情報紙
であい
vol.79 2016 AUTUMN
公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC／ハイエック
Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

特集

留学生ふれあい交流 in しもかわ
～しもかわうどん祭り参加と環境体験を実施～

8月28日（日）・29日（月）の2日間、北海道内の大学に学ぶ外国人留学生等7ヵ国18名がHIECC主催・引率のもと下川町を訪れ、「しもかわうどん祭り」へ参加するとともに、環境未来都市「下川町」～森林を活かしたまちづくり～への取り組みについての講義や視察を通じて、環境問題について学んだ。

下川町の谷一之町長（後列左から6番目）と記念写真

●しもかわうどん祭りに参加（28日）

留学生一行は札幌駅からバスで約3時間30分の道のりを経て下川町役場に到着。早速、祭りのメインイベントである「百足大競争」の参加に向けて練習を行った。同競技は1チーム8名（この他監督及びコーチ）での参加となるため、男性チーム・女性チームでそれぞれチームを作ることとなった。練習では最初は足の動きがばらばらだったものの、何回か練習するうちに自然と足並みが揃うようになり、留学生同士も打ち解けあうこともできた。

練習が終わった後は、まつり会場で百足大競争が始まるまでの間、屋台の食べ物やアトラクションなどお祭りの雰囲気を楽しんだ。このお祭りはもともと「ふるさと祭り」の名称で親しまれていたが、町の活性化のため、下川町を代表する特産品である手延べうどんの名称を用いるようになり（かつて北海道を代表する製麺工場がこの地に創業し、製麺技術が広がったという）、今年で13回目を迎える同町の夏の一大イベントとなった。

百足大競争

いよいよはじまった百足大競争では、緊張と気合いが入り交じった中、それぞれの足をロープに結び、「イチ、ニ、イチ、ニ」と声を掛け合いながらスタート。男性チーム、女性チームの順で走ったが、転倒するチームが続出する中、どちらも無事にゴール！賞金獲得の期待も持たれた中、結果は残念ながら両チームとも参加賞であったが、その奮闘ぶりに町民の方々から大声援を受けていた。競技後には下川町の谷一之町長から励ましの声を掛けていただくとともに、メイン会場のステージ上でも一人ひとり紹介され、町民の方々から暖かい拍手をいただき、留学生にとって充実した経験となった。

●下川町における環境への取り組み（29日）

下川町は、町の面積の約90％が山林で、そのうちの約8割が国有林となっているなか、原木を安定供給するための「循環型森林経営」や、森林資源を余すことなく利用するカスケード利用、また、木質バイオマスエネルギーの利用による温室効果ガスの大幅な吸収・削減による「低炭素社会」の構築への取り組みなどが評価され、平成20年7月に「環境モデル都市」に、全国6都市（※平成21年の追加認定都市とあわせて現在13都市）の一つとして認定された。

カラマツの炭化について説明を受けた

午前中に講義では、下川町職員より、町における環境への取り組み内容についてそれぞれ丁寧に解説をいただき、留学生は皆熱心に耳を傾けていた。その後は、役場裏熱供給施設や木質原料施設などを視察、森林組合北町工場では、地元のカラマツを炭にして売るアイデアや、炭をつくるときに出る木酢液の活用などにより、全国的なモデルとされている「ゼロ・エミッション」への取り組みについて説明を受けた。また、同町の超高齢化問題と低炭素化を解決するためのエネルギー自給型集住化エリアとなっている「一の橋バイオビレッジ」の視察もさせていただき、実際に目で見て同町における環境の取り組みを理解することができた。

●ふりかえり（グループディスカッション）

プログラムの最後には「下川町の印象」と「環境」をテーマにグループディスカッションを行った。

はじめに下川町の印象では、「自然災害を乗り越え森林経営を成功させたたくましさ」「人口は少ないが町民の優しさを感じた」「町が静かで安全快適」「食べ物（うどん）が美味しい」など多くの意見が出された。

グループディスカッションの様子

また、「環境」に関しては、「地域の特性にあった環境への取り組み」「環境の取り組みから雇用や収益を生む取り組み」などが参考になったといった意見や、「自分の町でも環境を守るために、住民や企業の意識を変えることが大事であることを学んだ」といった意見も出された。

●最後に

2日間のプログラムを通じて留学生からは、「いままで名前も知らなかった下川町についてとてもよく知ることができた」といった意見が最も多かった。また、「いろいろな国からの参加者や地域の人々と交流ができた」との意見も多かった。

HIECCでは、本プログラムを通じて、今後とも外国人留学生に北海道の地域の魅力を知ってもらうとともに、学生同士や地域住民との交流の場を提供し、地域の国際化に貢献していきたいと考えている。

「世界につながれ、どさん子の心」

――道内NGO・国際交流団体などの活躍

第10回

北海道NGOネットワーク協議会は2000年3月に設立し、17年目を迎えました。

設立前夜、1998年からそれまで世界NO.1だった日本のODA予算の削減が始まると共に、市民活動活性化を目指すNPO法案が施行され、政府から市民主体の取組みへ大きな方向転換がされました。2000年には貧困撲滅など国際社会の目標を明確にした国連ミレニアム宣言（MDGs）が採択され、世界の連帯という明るい兆しが見え始めた矢先、2001年にアメリカ同時多発テロ、その後のアフガン、イラク戦争という逆行する暗い出来事が起こりました。紛争時の人道支援や復興活動の立役者としてNGOという言葉が世間に知られつつある頃でもありました。

その後、貧困問題を中心とした地球規模の課題は依然として解消されず、むしろ複雑化、巨大化しています。国際社会の中で、国益や企業による利益を優先した関係を続けていては本当の平和は達成できないことから、市民参加の国際協力の輪を広げよう、と共感した皆さんの意思によりこの北海道NGOネットワーク協議会が作られ、約30団体のNGOが加盟しています。

NGOがマスメディアを利用した広報、宣伝活動を行う時代になり、国際舞台で活躍するNGOの報道を目にする機会も増えていますが、北海道にはそのような大きなNGOとは趣を異にした小さくともユニークな取り組みを行う団体が多く活動しています。大事なことは小さな活動でもコツコツと続けること、そして市民レベルの活動に広げていくことだと思います。本当の世界の平和を実現するために、国連、国、企業など様々な役割を担う媒体がありますが、その底辺である一人ひとりの市民の理解が最も重要です。国際協力の市民レベルへの浸透を促し、国際協力の舞台裏を支えることが当協議会の役割だと思います。多くの皆さんと様々な取り組みを通じて国際協力の輪を広げて行きたいと願っております。

当会主催のメイン行事となっている「国際協力フェスタ」は19回目となります。今年も12月3日（土）札幌駅前地下歩行空間「チカホ」にて開催予定ですので、どうぞお立ち寄りください。

北海道NGOネットワーク協議会　〒060-0001　札幌市中央区北1条西3丁目札幌MNビル3F　公益財団法人　札幌国際プラザ内
TEL 011-211-5028　FAX 011-232-3833

世界ふれあいひろば2016

（主催 ： 独立行政法人国際協力機構北海道国際センター）
9月3日（土）10:00 ～ 15:00　JICA北海道（札幌）＆リフレサッポロ（札幌市白石区）

今年で13回目を迎える「世界ふれあいひろば2016」が、国際協力機構北海道国際センター（JICA（ジャイカ）北海道（札幌））およびリフレサッポロにて開催された。

JICA研修員（※）や札幌市の国際交流員など世界約30か国の在道外国人と来場者が交流を楽しめるイベント。アジアやアフリカ・中南米地域出身のJICA研修員に挨拶を教えてもらいながら会話も楽しめるブースや、世界各国のゲーム体験、国際交流・協力に携わるNGOや札幌の姉妹都市紹介、また中庭でのダンスや歌のパフォーマンスなど、参画団体の特徴を生かした多種多様な企画が用意されていた。

フィリピンのバンブーダンス。足を挟まれないように

各国ブースでは、家族に背中を押されつつ、子どもたちが準備してきた英会話のメモを見ながら、「ハロー」などJICA研修員に話しかけていた。ある女の子は、マラウイの女性に手作りの折り紙を渡すと、「少し待っていて」とその方はブースを後に。しばらくすると、色鮮やかなアフリカ布を持って現れ女の子にサプライズプレゼント。思いがけない出来事に、女の子と一緒にいたお母さんは感激していた。

ワールドパスポートを手に各ブースへ

アフリカンドラムの音色に誘われ踊りの輪が広がる

中庭での演目では、日本の大学生によるYOSAKOIソーランに始まり、民族衣装に身を包んだミャンマーの方々の歌の披露や、アクロバティックな動きのカポエイラ（音楽、ダンスの要素が入ったブラジルの格闘技）など迫力あるパフォーマンスが来場者を魅了。参加型の演目も多くあり、最初は躊躇していた子どもたちも各国の踊りにチャレンジしていた。最終演目のアフリカンドラムでは、会場に響き渡るリズミカルなドラムの音色に、自然と踊り始めるアフリカ出身のJICA研修員たち。次第に踊りの輪が広がり、大人も子どもステージ前でビートに合わせて自由に体を動かし、会場は一番の盛り上がりを見せていた。来場者にとって、短時間に世界を身近に感じられる有意義な一日となっていた。

（※）JICA 北海道では、研修事業を実施し、アジア、大洋州、中南米、中近東、アフリカなど約 100 か国の開発途上国から年間約 1,000 人の行政官・技術者などを受入いている。

韓国・慶尚南道とミニバレー交流を実施

8月30日～9月1日の3日間、北海道ミニバレー協会の小島秀俊会長はじめ会員19名がHIECC同行のもと韓国・慶尚南道を訪問し、現地の関係者とミニバレー交流を行った。

ミニバレーは、1972年に北海道の大樹町で同協会の小島会長により考案された競技で、小さな子どもから高齢者まで幅広い年代が楽しめる生涯スポーツとして、特に高齢化が進んでいる中で、多くの愛好家に親しまれている。

HIECCでは、2012年から同協会の協力により、同じく高齢化が進んでいる韓国にミニバレーを紹介し、韓国における高齢者の健康増進や生き甲斐づくりなど、地域社会への貢献や、両地域との友好親善のため、これまで毎年、派遣・受入による交流を行ってきたところである。

参加者全員で集合写真

ミニバレー交流の様子

今回の訪問では、韓国で済州島に次いで2番目に大きな島である巨済島を舞台とし、初日の歓迎会ではHIECCのパートナー関係にある慶尚南道体育会のペ・ヒウク事務処長はじめ、慶尚南道バレーボール連合会のソ・ソクマン会長、巨済市バレーボール連合会のキム・ジョムス会長のほか、巨済市のクォン・ミンホ市長や慶尚南道庁の職員にも出席をいただき、盛大な歓迎を受けた。

2日目に行ったミニバレー交流では、これまでの交流の成果により、平日にもかかわらずミニバレー愛好家約30名が巨済島に集まっていただき、両地域のメンバーで試合形式による交流を行った。今回の試合では、韓国側がはじめて1セットを先取するなど、着実にレベルが上がってきている印象も見受けられた。

本年は、北海道と慶尚南道との交流趣意書締結10周年を迎えることから、同日程で辻泰弘道副知事や日韓友好北海道議会議員連盟の議員3名も慶尚南道を訪れており、ミニバレー交流の様子を視察いただいた。また、今回はじめての試みとして、北翔大学から谷川松芳教授と9名の学生が一部訪問団に同行し、3日目には慶南大学（昌原市）の学生とミニバレー学生交流を行った。北翔大学ではミニバレーサークルに約90名が在籍するなど、同スポーツに力を入れていることもあり、参加した学生は、初めてミニバレーを行う韓国の学生に対して熱心に指導しながら楽しく交流を行っていた。

今回の訪問期間中、次年度の計画や慶尚南道を発祥とするミニバレー協会発足に関することなど、今後の交流に向けて前向きな協議も行うことができた。HIECCとしてもこれまでの交流の成果を踏まえ、今後とも引き続き支援していくこととしている。

第2回 インターナショナルごみ拾いビーチウォーク ～秋の石狩浜をきれいに!! ～

砂に埋もれたごみを分別しながら拾う参加者たち

「ラブアース・クリーンアップ in 北海道」は、私たちの北海道を私たちの手で、世界一きれいな場所にする、ごみ拾いのムーブメント。その活動の一環として、第2回「インターナショナルごみ拾いビーチウォーク」が青空と白い雲が広がる秋晴れの下、石狩市石狩浜で開催された。（主催：認定NPO法人北海道市民環境ネットワーク「きたネット」、NPO法人北海道海浜美化を進める会、協力：在北海道外国公館・通商事務所等協議会、（公社）北海道国際交流・協力総合センター等）

たくさんのごみを収集し充実した表情の中国の留学生たち

当日は、在札幌ロシア連邦共和国総領事館の関係者や北海道中国留学生で構成される「学友会」などの協力もあり、外国人15名を含め101名がごみ拾いに参加した。開会式が終わると、参加者は火ばさみとごみ袋を手に早速ごみ拾いを開始。スタートして数十分後には、ほとんどの参加者の一枚目のごみ袋がいっぱいに。二枚目の袋を手に、まるで宝探しをするように砂に埋もれるごみを見つけながら、足を進めていた。スタートした時には遥か彼方に見えていたゴール地点も、真剣にごみを拾っている間に、ほとんどの参加者が到達していた。

北海道大学で学ぶ中国の留学生は、「中国でも環境の意識は高まっています。このような活動に参加するのは、地球のためにという思いがあるからです。」と笑顔で語っていた。また、ロシア総領事館の関係者は、「ごみ拾いの活動に参加したのは初めてですが、市民や道民の方との交流もあり、また、この活動をすると自分自身が何かの役に立っている感じがします。来年も続けたいです。」と感想を述べていた。

力を合わせて拾ったごみを前に全員で記念撮影

最後に、北海道市民環境ネットワークの川口理事長は、「ごみを拾う経験から、次はごみを捨てないという意識に繋がる。また、一度きれいになった場所は次にごみを捨てづらい環境になる。その連鎖が北海道をきれいに、さらに地球をきれいにしていくことになる。」と閉会式を締めくくった。

参加者が力を合わせて集めたごみは合計560kg。石狩の美しい自然に包まれながら活動に参加した一人ひとりの表情は、達成感に満ち溢れていた。

さっぽろ留学生日記

アリ　ロシャニアンファレド さん
イラン・イスラム共和国
（北海道大学大学院農学研究院・農学院、ビークルロボティクス研究室）

次世代へつながる農業機械の開発食料自給率の向上へ

農業機械のパイオニアの国・日本へ

日本の4.5倍の国土を持つイラン。飛鳥時代から日本とは長い交流があるとされ、文明の十字路ともいわれる国。アリさんは首都テヘランから空路約１時間の場所にあるアルダビールの出身。海抜1,300mの高原に位置し、緑に恵まれた避暑地としても人気の町。母国の大学を卒業後、イランで8,000人の応募者から6人しか選ばれない難関の奨学金を得て2014年から北海道大学大学院農学研究院で学ぶ。「ハイレベルな水準をもっている国が留学先の対象。日本は自分の専門のパイオニアの国であり、日本を選ばない理由は見当たらなかった」と。北海道に以前留学していた先輩から生活情報を教えてもらい、来道前の心配は特になかった。「将来は自分の専門分野を学べる研究室をイランの大学に作りたい」と意欲的に語っていた。

ビークルロボティクス？

「何もないところから新しいものを作り、ロボットが新しい命を得る瞬間が好きです」と目を輝かせながら話すアリさん。現在研究しているのは、かぼちゃやメロンのような重い農作物の収穫用ロボットアームの開発。「次の世代のことを考えると農業が必要と考えこの専門を選びました。自分の研究で効率的に収穫を倍増させることにより、高齢化する日本の農家の問題や、将来の食料自給率にも貢献できるはずです」と。研究室で新しいアイディアが浮かべば、担当教授が「やってみよう」と言ってくれ、恵まれた環境で学べていると感謝の思いも。母国では9つの発明で特許を得た経験もある。アリさんの研究成果が未来の食料生産向上に繋がるのかもしれない。

大好きな日本食、苦労した日本語

イランの主食は米とパンで、アリさんは挽き肉のキャバーブ（ケバブ）が大好物。「日本に来てからはお寿司とみそ汁の虜に。好きなネタはいくら、サーモン、平目、えび、ハマチ。みそ汁は学食で3杯注文し驚かれました」と笑う。大学生活ではサポーターがいるので心配はないが、挨拶でハグをしないことや、先生と直接話す機会が少ないことに最初は戸惑ったそう。また、来道直後は日本語の表示に苦労したエピソードも。「看板に書かれた英語を頼りに銀行に入ると、日本語の説明がわからず途方に暮れました。入店して30分後に相手がジェスチャーで何とか伝えてくれたのが、『ここは銀行ではない』という意味。銀行ではなく某携帯電話会社に行ったことがわかりました」と今では笑い話に。確かに、銀行の看板は英語より漢字が大きく表示され、外国人の目には携帯会社の看板が最初に目に飛び込んでくるのは当然かもしれない。

自ら開発したロボットアーム付き農機具の前で

どんな経験も笑顔で語るアリさんから何事も前向きに捉える姿勢が伝わってくる。今後の課題を見据えたアリさんの研究と思いが、農業分野の未来を照らしていくのだろう。

ハイエック（公益社団法人　北海道国際交流・協力総合センター）会員入会へのお願い

北海道国際交流・協力総合センター（HIECC ／ハイエック）は、会員の会費で運営されています。北海道における国際活動の総合的、中核的な拠点として、世界各国との国際交流・協力活動などを通じて北海道の振興発展に貢献して参ります。

年会費	法人等会員	1口	10,000円
	一般個人会員	1口	5,000円
	学生・主婦・シニア等会員	1口	2,000円

入会のお申込みは随時受け付けております。
また、入会口数は1口に限らず何口でも結構です。

会員特典

1. シンボルマークの会員バッジ進呈
2. 季刊誌「Hoppoken」（年4回）、「年報」、国際協力情報紙「であい」（年3回）を配布。（ホームページの会員専用ページでは「Hoppoken」のバックナンバーの閲覧が可能）

HIECCの主な事業

国際交流・国際協力情報の提供、国際理解講演会・セミナーの開催、海外派遣事業、国際交流事業への助成、通訳ボランティアの派遣、留学生と地域のふれあい交流、調査研究事業など

公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
ＨＩＥＣＣ／ハイエック

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館
発行日：2016年10月11日
TEL. 011（221）7840　FAX. 011（221）7845　http://www.hiecc.or.jp
E-mail：intc@hiecc.or.jp（交流・協力部）
印　刷：岩橋印刷株式会社